

バクトリアに関する二三の考察

足 利 惇 氏

デカン大学 H. G. ローリンソン教授はその名著『バクトリア』において¹⁾、「バクトリア」なる地名の語源は確実ではないが、おそらく (A)paktra- ‘北方’ に求めるべきであろうとし、イラーン民族の最北方における植民地なる所以をもってその理由としている。しかしバルトロメー²⁾も指摘している如く、アヴェスタ語 apāxtara-, apāxōdra- ‘北方の’ という語は apānk- (Skt. apānk-) ‘うしろへ’ の派生詞で、本来は ‘うしろにある’ という謂の形容詞、すなわち、南にむかって立つ時 ‘うしろにある’ 方角から転じて ‘北方の’ 方角を示すようになったものである。従って頭音 a- が中期語層たるパフラヴィー語では尚お常時保持されているのは当然のことで (apāxtar ‘北方’——これに対し近世ペルシア語では bāxtar, bākhtar となる)、これをバクトリア／バルフが下に示すように古・中・新三期を通じてすべて頭音 a- を保持していない点に比すれば、ローリンソン教授の提言が Volksetymologie の類にすぎないことは、これを否定することができないであろう。人名もそうであるが、地名に至ってはその語源設定には、いっそうの注意が望まれる。そうした意味からも、まず、このバクトリアがいかなるイラーン語形を呈示するかを見ておく必要がある。

アヴェスタ語 ³⁾	: Bāxδī-	古代ペルシア語 ³⁾	: Bāxtri-
エラム語 ³⁾	: Ba-ak-ši-iš, Ba-ik-tur-ri-iš		
アッカド語 ³⁾	: Ba-aḥ-tar	ギリシア語	: Βάκτρα (neut. pl.)
パフラヴィー語	: b’l	近世ペルシア語	: Balḥ (Balkh)

これらを通観してみると、流音の存在は本来的なもので、これを欠く形は方言形ではないかを思わしめる。そのうえ、アヴェスタ語形 Bāxδī- の -δ- 音は uxδa- ‘saying’ (<*uxδa-), vaxōdra- ‘discourse’ (<*vaxδra- <*vaktra-) における -δ- 音と同じく、本来は -δ- 音であるべきものがアヴェスタではこのように一貫して -δ- 音としてあらわれるものであるから、Bāxδī- をただちに梵語 *Bhāga-dhī- に比定して ‘神部、神土’ とするには難がある。従ってダリウス大帝の碑文で有名なクルディスターン

にあるベヒスターン (Behistān, 今日では Bisutūn という) の古名 *Bagastāna ‘神の在すところ’ とか、今日イラクの首都なるバグダード (Baġdād) <*Bagadāta ‘神によりて与えられた町’ などにみえる前分 *baga-* ‘神’ をバクトリアなる地名に見出そうとすることは、当を得ていない。それよりもむしろ、このバクトリアなる地名の起原となれるバルフ河に目をむけるべきである。『ブンダヒシュン』書⁴⁾も「バルフ河はアプルセーン山からバーミヤーンに入り来ってウェーフ河に注ぐ」といっているように、バルフ河はバーミヤーン (『大唐西域記』の梵衍国) の峡谷に沿うて北流シアームー・ダルヤー (アム河) に注ぐ一支流であるが、その流域は古来豊饒の地として知られ、ストラボーン⁵⁾も *πρόσχημα τῆς Ἀριανῆς* ‘アリアナの誇り’ と言い、『大唐西域記』第1, 縛喝国の条にも「土地所産物類尤多。水陸諸花。難以備挙。」と言っているように、気候温和にして産物に富み、また東西文明が合流して発達したところである。バクトリアが多くの宗教の発祥地であり、おそらくは、それを育んだところであることは、すべての地理的条件がよくそれを示している。拜火教の教祖ともいわれ、或いはその改革者ともいわれるゾロアストラの生地とさえ伝えられている⁶⁾ のも故ありというべきである。かかるバルフ川であってみれば、それがもろもろの恩恵を頒与してくれるものと称されても不思議はなからう。こういう点から妥当とみられるのは J. マルクワルト教授の提唱である。教授はこのバルフ河の古代ペルシア語形を *Baxtā (nom.), *Baxtāram (acc.), *Baxtrah (gen.) と推定し、‘bestower, distributor’ と解した⁷⁾。つまり教授は語根 *bag-/Skt. bhaj-* ‘頒つ、頒与する’ の行為者名詞とみたのである。かかる行為者名詞が単に理論的に存在するばかりでなく、実際にも存していたことはパフラヴィー語 *baxtār*⁸⁾ によっても立証される。さらに教授は⁹⁾、Av. Bāxδī-/Old Pers. Bāxtri- は第1音節に *vr̥ddhi* の階次を有し、末音に ethnic termination -i を有するものと解した。河川に宗教・社会・民生等に関連のある名称を付するのはよく見うける例で、早いはずだが、このバルフ河の流入する本流である。そのオクソスが上に挙げたように¹⁰⁾ ウェーフロートの異名を具えているのも、バルフ河に比較しうほどの意義内容を有していることを示唆しているであろう。

さてそのバクトリアであるが、イラールン最古の出典の一つとしては、古代ペルシア語の磨崖資料をのぞけば、アヴェスタの『ウィデーウダート』I, 6 を挙げるに異論はなからう。アフラ・マズダーは「美しき、幡を揚げた バーフジューを (Bāxδīm srīrām ərədwō.drafšām) 創造した」とある。「美しき (srīrām)」はパフラヴィー語訳には *nēvak pat ditan* ‘見るに美しき’ とあり、「幡を揚げたる (ərədwō.drafšām)」は

aḅrāšt-draḅš 'with up-lifted banner' とし、さらに 'ku draḅš 'andar aḅrāšt + 'dārēnd'¹¹⁾, 'hast 'kē ētōn gōḅēt ē 'vasih 'andar aḅrādēnd 'ku dušman 'apar 'andar kušēnd '即ちそこには幡が高く掲げられている。或る人びとはこう言っている“敵がそこで斃されるために、そこには〔幡が〕数多くかかげられている”と。’と註している。erədwō が Skt. ūrdhvā- に相当し、draḅša- が Skt. drapsā- に相当することはいうまでもない。この draḅša-/drapsā- ‘幢幡’が他面に宗教・社会的な背景をも有しうることは、Ṛg Veda IV, 13, 2b にも見えて明らかである。

prāty agnir uṣāsām āgram akhyad ūrdhvām bhānūm savitā devó aśred
vibhātīnām sumānā ratna-dhéyam | drapsām dávidhavad gaviṣó ná sātva |
yātām aśvinā sukṛto duróṇam ánu vratām váruṇo yanti mitró
út sūryo jyótiṣā devá eti || 1 || yát sūryam divy āroháyanti || 2 ||

1. 火の神は、心地善げに、照り渡る曙光の女神達の初宝物の賜を照覽し給えり。
アシュヴィンの双生神よ。善人の家に来れかし。日の神は光を帯びて今や昇れり。
2. サヴィトリの神は陽光を高く掲げたり、「旗」を打振りつつ、牛を求めて戦を挑む勇士の如くに。

ヴェルナの神とミトラの神とは定めたる法によりて進み来る、太陽を天に於いて昇らす時に。

この文中の drapsā- は「旗、牙旗」で、サーヤナの註しているとき pāṛthivām rajo……‘黄塵、砂塵’ではない。

さて問題はその旗であるが、『ウィデーウダート』の Bāxḅī の町のそれについて、パフラヴィー語は一説として戦勝に縁のあるらしいことを示唆しているも明かでなく、この点このアヴェスタ句をパラフレーズした『ブンダヒシュン』書¹²⁾も同様である。一般的に言って、旗をテントまたは建造物の上に掲げるのは西域の風習とみえ、現に『魏書』102、列伝第90、西域の条にも「王於其国内、別有小牙十余所、猶中国之離宮也。」とある。小牙とは小さき牙城の意味であるが、その牙が牙旗なることは明かである。旗が重要な標識をなしていたことはイラーン一般に通じて見うけられるところで、サーサーン王朝の大蘇が Draḅš i Kāviyān とよばれていたことは周知の事実であり、また唐代長安に避難してきたイラーン・ゾロアスター教徒が神策軍に編入された際、王子使者に与えられた軍職名「押牙」というのも、この draḅš ‘旗’と dāstan ‘to hold’ または burtan ‘to bear’ の派生詞との compound として理解される。C. ド・アル

レーズ¹³⁾ が Bāxḍī の「揚げられたる旗」に註して 'Ces drapeaux élevés étaient peut-être le marque de la résidence du chef du pays.' と言っているのも、けだし一家の見識とみることができる。尤も、このことがバルフにのみ特色として挙げられ、他にもあったであろう同様の事象に言及されていない点は、依然として疑問のままに残る。

つぎは、この町にあったと伝えられる Naubahār についてであるが、まずフェルドウシーのシャフナーメ¹⁴⁾ を挙げてみよう。

be-Balḥ gozīn šod bar ān Naubahār 撰ばれしバルフにナウバハール建ちぬ、
ke āteš-parastān bad-ān rūz-gār かの時に拜火教徒のありければ。

とある。「かの時に」とはゴシュタースプ王の時ということ、つまりゾロアストラに帰依してこれを外護したゴシュタースプ（ウィシュタースパ）王の治世に、ナウバハールがこの町に建立されたというのである。この記事にみえる時代錯誤は今では問わぬとして、Vullers 版では āteš-parastān のかわりに yazdān-parastān ‘ヤザト崇拝者たち’ とあるが、等しくゾロアストラ教徒をさすことにはかわりはない。この建物はヤークート (Yāqūt—1178-1229 A. D.) も記している。かれはアナトリア生まれのギリシア人。奴隸としてバグダードの富商に売られたが却って教育を受け、同地で商業を営むかたわら、インド、ペルシアを旅行し有名な地理家となった。その言うところによれば、この町が Nau-bahār と称する一大殿堂を有し、信者はそこにおいて尊信の印として円蓋塔 (gumbad ‘cupola’) の上に旗を揚げたとのことである。バルビエ・ド・メイナール¹⁵⁾ はこの記事に関して

Ce temple était en grande vénération chez les Persans, qui s’y rendaient de fort loin en pèlerinage, le revetaient d’étoffes précieuses et plantaient des drapeaux au sommet de la coupole.

と言っている。これはシャフナーメの句と同巧とみることができる。ただ残念なことには、パフラヴィー語 Vidēvdāt にしても、『イラーンの都城 (Šahrīhā i Ērān)』にしても、バルフにこの建造物のあったことを謳っていないのである。『イラーンの都城』§8 には

‘andar Baḡl i vāmīk šahristān <i> Navāzak Spandiyāt i Vištāspān ‘pus kart かがやくバフル〈州〉に、ウィシュタースプの子スパンディヤートは都城ナワーザクを建設した。

と記しているにすぎない。J. J. モーディ¹⁶⁾ はこのナワーザク (Navāzak) のなかに

Naubahār とのつながりを求めようとしているが、頭音以外にはこの試みは成立しにくい。かかる神話的の都城 (!—Navāzak) よりも、むしろ Nau-bahār は『大唐西域記』にみえる納縛僧伽藍に比定すべきである。同書第 1, 縛喝国の条下に

城外西南有納縛唐言新僧伽藍，此国先王之所建也。……中略……伽藍西南有一精廬，建立已來多歷年所，云々

とあるのがそれである。今この個所について、スタニスラス・ジュリアン¹⁷⁾ の仏訳を見るに

En dehors de la ville, au sud-ouest, il y a un couvent appelé Na-po-seng-kia-lan (Nava saṅghārāma), ou le nouveau couvent, qui a été construit par le premier roi de ce royaume……(p. 29)

Au sud-ouest du couvent, il y a un Vihāra. Depuis sa fondation, il s'est écoulé bien des années……(p. 32)

とある。納縛僧伽藍はまさしく Skt. Nava Vihāra であるが、その vihāra ‘精舎，淨舎，仏殿，遊園’ はそのまま借用されてパフラヴィー語においても、その存在は vihār の形をもって措定することができる。Steingass の *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, p. 209 にも behār に ‘Buddhist temple’ の義を載せている。それ故にトマス・ハイド (Thomas Hyde) がシャフナーメの Nau-bahār を Novum ver ‘新しき春’ とラテン語訳しているのは、NP. bahār < Pahl. vahār ‘春’ (cf. Old Pers. vāhara- ‘spring’ in Ūravāhara- ‘April~May’ against Skt. vāsara- ‘bright’) と誤ったものである。Nau-bahār とは ‘新しき春’ ではなくて、少なくとも ‘新しい宗教的建造物’ をさすものであったに相違ない。ジュリアンが「一精廬」を訳して un Vihāra としたのはさすがに碩学たることを思わしめ、敬服する次第である。

つぎに、L. ヴィヴィアン・ド・サンマルタン (L. Vivien de Saint-Martin) はジュリアンの『大唐西域記』仏訳第 2 巻 p. 289 に、この縛喝国について次のごとく述べている：

Hiouen-thsang parle de Po-ho-lo (Balkh), cette antique métropole de l'empire bactrien, comme d'une ville bien fortifiée, mais de grandeur médiocre et faiblement peuplée. On peut remarquer que la transcription chinoise du nom de Balkh est tout à fait analogue à la forme arménienne Pahl. Le bouddhisme était florissant dans toutes ces contrées.

この町と仏教との関係で興味のあるのは長者バルカ (Bhalluka)¹⁸⁾ である。かれは釈

尊成道のときはじめて仏に帰依し、その髮爪を乞うて本国に帰り塔を建てたといわれているが、その本国というのがこのバルフであった。「バルフの人」を Bāhlika とあらわせば、かれの名もこれに近いのではなからうか。それはさておき、ド・サンマルタンが Po-ho-lo (縛喝羅) をもってアルメニア語形に類似しているという点について考察してみるに、それは多分、近世ペルシア語形が Balḥ (Balkh) といっているのに対し、l と ḥ が位置を倒置している点を指しているのであろう。しかし -hl (xl)- は中期イラン語の慣例であるから、この町(州)のパフラヴィー語名を上を示す際、筆者はことさらにこれを、b'l と子音転写しておいた。Ālef は a, ā, ḥ(x) をあらわしうるから、b'l は Bāxl/Baxl である。アルメニア史家がこの町を Bahl-Šahastan といっているのも、そうした観点からすれば当然である。いうまでもなく、これはパルティア語 *Baxl-γšāhastān '王の在すバフル、王城バフル、王都バルフ'の転化であろうが、中期ペルシア語(パフラヴィー語) *Baxl-šāhistān の転化としても差支えない。ただこの呼称について筆者が注意を喚起したいのは、これと「小王舎城」との同定に関連して生ずる問題についてである。今、『大唐西域記』第1、縛喝國の条下をみるに

国大都城周二十余里，人皆謂之小王舎城也

とあるのをジュリアンは単に

Tout le monde l'appelle la petite ville royale. (p. 29)

と訳しているのみで、マルクワルト¹⁰⁾と同様、「小王舎城」の「小」がどこから由来しているかについては、何も触れていない。しかしこれについては、先ず「王舎城」が *šāhistān に契当することは言うまでもないから、その前に来る Baxl と「小」との関係から解きほぐすことが必要となる。周知の如く、イラン語では l と r とはよく交替する。文字(パフラヴィー)においても L が l と共に r をも表わすことは常に見られるところである。よって Baxl が Bahr と発音されたとしても少しも不思議でない。その bahr とはパフラヴィー語では「部分」を示す。その派生形 bahrik が「個々の点において」を意味して hamakihā「その全体において」と対立的に用いられるのも、この間の事情を遺憾なく伝えている。また bahr-var が 'partner, shareholder' であることも参照すべきである。「部分」は「全一」に対するものであるから、当然「小」を意味しうる。そこで玄奘の「小王舎城」を考察してみるに、「人皆謂之小王舎城也」とあるその「人」とは、当然バルフの町、またはその近辺の土人の謂であるが、問題は、(1)かれらが「小さな王城」という意味において (1) Baxl-šāhistān を用いていたのか、それとも、(2) Baxl-šāhistān と土人が言っているのを玄奘が「小さな

王城」と解したのか——そのいずれかであろう。(1) の場合では、「小」を冠称しても、あとに「王舎城」なる表現が来るので、「小」に「少劣」を感じることにはなかったかもしれない。もちろん、Baḫl の原義 ‘bestower, distributor’ (*baxtar-/Pahl. baḫtār——の派生詞というほうが正しいが) が見失われていることはいうまでもない。これに対して (2) の場合では、けっきょく玄奘の誤解ということになるろう。筆者は(1)、(2) いずれをとるにしても、Baḫl-šāhistān と「小王舎城」との同定にからむ問題は、如上の説明によって、一応解決したと考えることができる。そして(1)、(2) いずれの立場をとっても、バルフは、Bāḫl よりむしろ、Baḫl (Baḥl) と短母音で発音されていたことを思わせる。Baḫl では bahr ‘小’との関連が説明しにくいからである。従って b’l なる子音表記においては、第1 Ālef は、(a) ä を示すための scriptio plena か、(b) 本来有していたと考えられる ā を表記したものではあるが、今やそれが単なる史的記法に墮し、現実の発音は ä となっていたか、そのいずれかであろうが、二中一を選べとならば、筆者はむしろ (a) の場合を執るであろう。

[付記——本稿は昭和10年イランから帰国して口頭で発表した旧稿に、二三修辭を加えたものである。従って旧稿のままではあるが、問題の中心点は今尚お解決済みとは言いがたいものを含んでいる上に、学縁も深い宮崎教授の記念特集号に祝意を表するため、稿をまとめて登載を乞う次第である。]

(筆者は京都大学名誉教授・本会会長)

註

- 1) H. G. Rawlinson: Bactria from the earliest times to the extinction of Bactrian Greek Rule in the Punjab, Bombay 1909, p. 1, n. 1.
- 2) Chr. Bartholomae: Altiranisches Wörterbuch, Strassburg 1904, cols. 70-71 (apāxtara-, apāxōdra-) および 82 (apānk-) 参照。
- 3) アヴェスタでは Vidēvdāt I, 6. 古代ペルシア語形はダリウス1世やクセルクセス1世の諸碑文にみえる。エラム語形とアッカド語形とは同王等の3語併用碑文に出るもの。
- 4) Bundahišn, ed. by Ervad T. D. Anklesaria (BdA), Bombay 1908, p. 88 2-3: Baḫl rōt ‘hač ‘Apursēn kōf Bāmiyān ‘andar ‘āyēt ‘bē ‘ō ‘Vēh-rōt rēčēt. —コペンハーゲン大学本 K20 folio 113 v. ll. 10-11 にも BALX rōt <‘hač> Aparsēn kōf Bāmiyān ‘bē āyēt ‘bē ‘ō Vēh-rōt rēčēt とあってほぼ同文。ウェーフ河とは、ここでは明かにオクソスを指す。アプルスーン/アパルスーンとはヒンズークシュ。+印は註11) 参照。
- 5) 『地理』 XI, 11, 1.

バクトリアに関する二三の考察

- 6) BdA 121₈₋₉: DĀRĀJA rōt <rōt> Bārān rat, 'čē-š mān i 'pitar i Zartūšt pat bār, Zartūšt 'ānōd zāt 'ダーラーシャ河 <即ち> バーラーン <河> は <河川の> ラト。何となればゾロアストラの父の家がその岸にあり、ゾロアストラはそこに生まれたからである。' —K20 folio 116 v. ll. 5-7 にも DĀRĀJA-rōt rōt BĀRĀ rat, 'čē-š mān i 'pitar <i> Zartūšt pat 'bār, Zartūšt 'ānōd zāt と同文が見える。但しこの句は両者共異解が可能。+印は註 11) 参照。
- 7) Markwart, Josef: A Catalogue of the Provincial Capitals of Ērānshahr, edited by Giuseppe Messina, Roma 1931, p. 34.
- 8) 例えば『DĒnkart』edited by D. M. Madan, Bombay 1911, p. 347, l. 1 にもみられる。
- 9) Markwart, J.: *loc. cit.* 10) 註 4) 参照。
- 11) パフラヴィー語テキストに付した+印は筆者による改訂を示す。
- 12) BdA 206₃₋₄: čahārom Baxl i pahlom 'dāt nēvak pat ditan martēm i 'ānōd drafš pat tuχšākīh 'dārēnd '第4に最勝の、見るに美しいバフルを創造した。そこの人びとは熱誠をもって旗をかかげている。'
- 13) C. de Harlez: Avesta. Livre sacré du zoroastrisme. . . . 2. éd. revue et complétée, Paris 1881, p. 8, n. 7.
- 14) Ferdowsi's Shahnameh. A Revision of Vullers' Edition, newly collated with MSS., together with the Persian Translation of the Latin Notes, Vol. 6, Teheran 1935, p. 1496, l. 5.
- 15) Barbier de Meynard: Dictionnaire géographique (Mu'ğam al-Buldān), traduction française abrégée par —, Paris 1861, p. 569.
- 16) Modi, J. J.: Aiyādgār-i-Zarirān, Shatrōihā-i-Airān, and Afdiya va Sahigiya-i-Sistān, translated with notes, Bombay 1877, p. 59, n. 1. 因みにこの書名は正しくは Apyātkār i Zarērān, Šahrīhā i Ērān and Aḡdīh ut Sahīkīh i Sagistān とあるべきもの、『ザレールの伝記、イラーンの諸都城およびサギスターン（シースターン）の奇蹟と奇瑞』である。
- 17) Stanislas Julien: Hoci-li et Yen-Thsong. Histoire de la vie de Hiouen-Thsong et de ses voyages dans l'Inde. . . ., traduite du chinois par —, Paris 1853.
- 18) 出典については赤沼智善：印度仏教固有名詞辞典，名古屋，昭和6年，p. 92 参照。
- 19) Markwart, J.: Wehrot und Arang. Untersuchungen zur mythischen und geschichtlichen Landeskunde von Ostiran, herausgeg. von H. H. Schaeder, Leiden 1938, S. 44: ein Beiwort. . . . wie. . . . šāhuārēn 'das königliche', chin. 小王舎城 *Siau Wang-'e č'ing* 'die kleine Königsresidenz' für Balch. [本書は1907年に殆んど印刷されていたものであるが、今は新版に拠ったので、追記の形をとってここに引用することにした。]